NEW JAPAN PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO
50th Anniversary 1972-2022

新日本フィルハーモニー交響楽団
2022/2023シーズン

2023
3
March

INGO METZMACHER

EIJI OUE

「あした」は、ナニイロ？

鹿島のしごと。
それは「あした」をつくること。
人と自然と向き合って、
よりよい毎日をつないでいくこと。
暮らしを描く、ものづくり。
無限の創造力で、彩り豊かな未来へ。

100年をつくる会社
鹿島

SUMIDA TOBIRA of classic 2022-2023 Season #13

3.17[金] 18[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会すみだクラシックへの扉 第13回
2023年3月17日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
3月18日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

◉ワーグナー (1813–83)
歌劇『ローエングリン』より「エルザの大聖堂への行進」 約5分
Richard Wagner: "Elsa's Procession to the Cathedral" from "Lohengrin", Act II

◉小曽根 真 (1961–)
ピアノ協奏曲「SUMIDA」＊ 約25分
(新日本フィル創立50周年委嘱作品／世界初演)
Makoto Ozone: Piano Concerto "SUMIDA" ＊

Part I
Part II

―― 休憩20分 ――

◉ブルックナー (1824–96)
交響曲第9番 ニ短調 WAB109（ハース版） 約60分
Anton Bruckner: Symphony No. 9 in D minor, WAB109 (Haas Editon)

I. Feierlich, misterioso　厳かに、神秘的に
II. Scherzo. Bewegt, lebhaft　スケルツォ。動きをもって、生き生きと
III. Adagio. Langsam, feierlich　アダージョ。ゆっくりと、厳かに

[指揮] 大植英次
Eiji Oue, Conductor
[ピアノ・作曲] 小曽根 真 ＊
Makoto Ozone, Piano, Composition ＊
[ベース] 小川晋平 ＊
[ドラムス] きたい くにと ＊

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙
Munsu Choi, Concertmaster
[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

SUMIDA TRIPHONY HALL SINCE 1997

文化庁

Profile

©飯島隆

大植英次［指揮］ Eiji Oue, Conductor

大阪フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者、ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー名誉指揮者。桐朋学園で齋藤秀雄に師事。78年、小澤征爾の招きによりアメリカ・タングルウッド・ミュージック・センターに学び、同年ニューイングランド音楽院指揮科に入学。タングルウッド音楽祭でレナード・バーンスタインと出会い、以後世界各地の公演に同行、助手を務めた。
これまでにミネソタ管音楽監督、ハノーファー北ドイツ放送フィル首席指揮者、バルセロナ響音楽監督、大阪フィル音楽監督等を歴任、2000年よりハノーファー音楽大学の終身正教授も務めている。05年『トリスタンとイゾルテ』で日本人指揮者として初めてバイロイト音楽祭で指揮し、世界の注目を集めた。大阪城西ノ丸庭園での「星空コンサート」や、「大阪クラシック」をプロデュース。14年には東京フィルのワールドツアーを指揮した。
レコーディングも活発に行い、ミネソタ在住の作曲家アージェントの作品集『グイーディの館』でグラミー賞を受賞した。09年ニーダーザクセン州功労勲章・一等功労十字章受章。

©Kazuyoshi Shimomura

小曽根 真［ピアノ・作曲］ Makoto Ozone, Piano & Composition

1983年バークリー音大を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、全世界デビュー。2003年グラミー賞ノミネート。
ゲイリー・バートン、パキート・デリヴェラ、ブランフォード・マルサリス、チック・コリアなど、世界的なプレイヤーとの共演や、ビッグバンドとの活動など、ジャズの最前線で活躍。また、NYフィル、シカゴ響、サンフランシスコ響、デトロイト響、NDRエルプフィルなど国内外のトップオーケストラとも共演を重ねる。
2021年には還暦を迎え、「OZONE60」と題したプロジェクトを、全国47都道府県で展開し話題を集めた。2022-23年はリーダーを務めるビッグバンドNo Name Horsesのベスト盤 'THE BEST' をリリースし全国ツアーを催行。現在、「From OZONE till Dawn」と題した若手音楽家の育成プロジェクトにも取り組み、後進の育成にも努めている。平成30年度紫綬褒章受章。
オフィシャル・サイト http://makotoozone.com/

Program Notes ◉小室敬幸

大植英次や佐渡裕の恩師であるバーンスタインは、指揮者としてマーラーを得意としたが、ブルックナーを振ったイメージはあまりないかもしれない。だが実は、交響曲第6番と第9番（2種）の録音が現存している。映像も遺した1990年2～3月の録音はウィーン・フィルと組んだもので、ブルックナーを得意としたカラヤンが亡くなったことから実現したようだ。バーンスタインが1990年10月に急逝せず、もう少し長生きしていたらブルックナーの録音がもっと残されたかもしれない。ちなみにワーグナーに関しては『トリスタンとイゾルデ』の録音が有名だが、若い頃には『ワルキューレ』や『神々の黄昏』の抜粋録音をバーンスタインは遺している。

■ ワーグナー：歌劇「ローエングリン」より「エルザの大聖堂への行進」

楽劇への移行期の作品 ►

『ローエングリン』が完成した1848年4月末から、およそ半年後――リヒャルト・ワーグナー（1813~83）は『神々の黄昏』（と後に改題される『ジークフリートの死』）の台本を執筆し始める。更に1852年には著書『オペラとドラマ』を出版。後に「〔音〕楽劇 Musikdrama」と呼ばれることとなる、当時流行していたスタイルとは異なる新たなオペラの在り方を提唱した。つまり視点を変えれば『ローエングリン』は、新たな様式へと踏み出す前の過渡期にあたる作品といえる。例えば幕が開く前に演奏される音楽が、前作『タンホイザー』までは序曲であったのに対し、『ローエングリン』では前奏曲となることで聴衆の拍手を挟まずに物語が始まり、ドラマの密度が高められているのである。

音楽の特徴 ►

吹奏楽で演奏されることもある「エルザの大聖堂への行進」は、原曲のオペラでは第2幕 第4場から第5場にかけて登場する。後にローエングリンという名が明らかとなる白鳥の騎士との婚礼のため、主人公エルザ（舞台となるブラバント公国の跡継ぎゴットフリートの姉）が他の女性たちに伴われながら大聖堂へと向かう音楽だ。ちなみに半音階的に上がっていくライトモティーフはエルザを祝福する民衆を、オーボエによるたおやかなメロディは、エルザの愛の歓びを表現している。

［楽器編成］フルート3、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、チャイム、小太鼓、大太鼓、シンバル、ハープ、弦楽5部。

■ 小曽根 真：ピアノ協奏曲「SUMIDA」

（新日本フィル創立50周年委嘱作品／世界初演）

クラシックとの出会い ►

小曽根 真（1961～）は1983年、アメリカCBSと契約を結び、翌年に世界的なデビューアルバム発表を控えていた。そこに収録する自作曲に自分の知らない新しい音楽を取り入れようと、友人から紹介してもらって出会ったのがプロコフィエフのピアノ協奏曲第3番であった。「ノックアウトされた」というほど魅せられ、小曽根自身にとってこの曲が作曲家としての原点のひとつになっているという。

小曽根と協奏曲 ►

それから20年後にあたる2003年の10月。今度は尾高忠明指揮の札幌交響楽団との共演で、初めてモーツァルトのピアノ協奏曲第9番「ジュノム」を演奏。この成功をきっかけにクラシック音楽の演奏にも本腰を入れるようになっていく。前述したプロコフィエフの第3番に加え、ショスタコーヴィチの第1番、ラヴェルのト長調、バーンスタインの「不安の時代」、ラフマニノフの第2番とパガニーニの主題による狂詩曲、もちろんガーシュウィンのラプソディー・イン・ブルーにヘ調の協奏曲まで…… この20年間で数多くのコンチェルトを手中に収めてきた。その経験を作曲家として集大成したのが「SUMIDA」である。協奏曲で定番の3楽章制ではなく、バーンスタインの「不安の時代」のように前半は悲劇的に終わるも、後半は明るさを取り戻していく2部構成となっている。

曲の構成と音楽の特徴 ►

第1部は「両国 Two Countries」の由来を音楽で描くところから始まる。弦楽器のピッツィカートがつま弾く旋律は下総国（現在の千葉県）を、それに応答する管楽器の旋律は武蔵国（現在の東京都など）を描き、2つの国に橋が架かることで未来へと繋がっていく様子をハープのグリッサンドで表しているのだ。ブリッジによって生まれた交流が活気のあるリズムを生み出し、それが祭りとなってゆく。何もかもが上手くいくわけでもないけれども、その困難を乗り越えてゆこうと前へ進み続けるが……。

ピアノトリオによる即興演奏を挟んで、第2部へ。今度は様々な歴史を経て悲しみを胸に抱えながらも歩みを止めない、いわば復興の音楽。ネガティブなエネルギーが変換されて、最終的には祭りとなって再生へ向かってゆく。結末には小曽根の特別な思いが込められているので、最後までご注目いただきたい。

[楽器編成]ピアノ独奏、アコースティックベース、ドラムス、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、シロフォン、レインスティック、タムタム、フィンガーシンバル、拍子木、トライアングルほか、ハープ、弦楽5部。

■ ブルックナー：交響曲第9番 ニ短調 WAB 109（ハース版）

遺された3楽章 ►

アントン・ブルックナー（1824～96）は1896年10月11日の午後3時頃、72歳で死去。同日の午前中にも作曲を続けていた交響曲第9番の第4楽章は未完で遺されることとなった。今日では散逸した資料が集め直され、丁寧に復元・補筆された上で第4楽章まで演奏されたレコーディングも徐々に増えている。だが今回のように、未だブルックナー自身が完成させた第3楽章までの演奏が多いのは、華々しくはなくともまるで死後の世界を思わせる浄化された結末が魅力的だからであろう。

曲の構成と音楽の特徴 ►

第1楽章はブルックナーが追求してきた独自の二部形式（≒ソナタ形式）を基に、新たな試みをおこなっている。同じ構成で曲を書き続けたと思われがちなブルックナーだが、最晩年まで挑戦をやめなかったことが分かる楽章だ。まずはベートーヴェンの「第九」冒頭を思わせる弦楽器のトレモロのなかから、徐々に主題となる音形が浮かび上がる。ただし管弦楽全体で威圧感のある第1主題の全体像を提示するまでの間に、第1主題以外の様々な素材が生まれていく点は「第九」と大きく異なる。

接続的な役割をはたす移行部（トランジション）を挟みつつ、弦楽器が長調で優しく奏でる第2主題、短いフレーズを反復していく第3主題を提示。ひとしきり盛り上がった後に静まると展開部へ突入して、それまでに使われた旋律の断片が絡み合っていく。最もユニークなのが第1主題の再現の仕方で、主題の前半は展開部の途中で、主題の後半は再現部（第2～3主題）の後に続く終結部（コーダ）においてゆっくりと回帰する。

第2楽章は複合三部形式（主部―中間部―主部）によるスケルツォ。ブルックナーの他の交響曲と同様に、主部だけでA（提示部）―B（展開部）―A'（再現部）というソナタ形式のような構成を持つ。第1楽章と同じニ短調だが、主和音（レ・ファ・ラ）以外はニ短調らしからぬ和音ばかりを用いることで、新しいサウンドを模索している。中間部は長調と短調の旋律が交互にあらわれて対比される。

第3楽章は緩徐楽章。ブルックナーが他の交響曲で使ってきたA―B―A'―B'―A"―終結部という構成が基にはなっているが、第1楽章のような新しい試みによって解体されている。天に召されることによって重病の苦しみから逃れんとするかのようなA（ホ長調）と、慈愛に満ちたB（変イ長調）のセクションが交互に現れながら、旋律が変奏されたり要素が追加されることで、より心が抉られるような音楽へと変貌を遂げてゆく。煉獄を想起させるクライマックスでは楽章冒頭の旋律が悲劇的に鳴り響くが、最終的には穏やかで透明感に満ちた世界へとたどり着く。

[楽器編成]フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン8（ワーグナー・テューバ4持替）、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽5部。